

矢口丹波正日記（八幡八幡宮神官）と文月浅間記の比較

月／日	矢口丹波正日記の記述	月／日	文月浅間記の記述
5/26	九ツ前浅間やけ音して、はい砂多く降る		
5/27	七ツ過雷なりくもり風吹、夜五ツ時浅間焼音夥く、はい大ニ降る		
6/29	昼九ツ前浅間焼音大にする	6/29	雨降ておやみたれど、なお霧たちこめたるやうにて、草木の葉にかかりて霜の置きたるごとし、此国にはたまさかある事驚かず
7/1	四ツ前浅間焼音おひたゝし、入相時分又おひたゝし		
7/2	七ツ過方入相まで浅間焼音おひただし、夜に入やけ砂多くふり、同雨よほど降る	7/2	こたびは薄雪の如くさえたる月夜のごとし、とよ年のしるしなり
7/5	晩浅間焼音おびたし、夜やけすな五分計ふる	7/5	昼過ぎ鳴りだし 戸障子ビリビリ 群雲・・・何事もなく日が暮れる
7/6	七ツ過浅間やけ音すさまじく煙にてくもり、暮六ツ雷鳴り砂おびたゞしく降り立、降音雨強くふるが如し、夜に入て砂強くふり、雷おびただしくなり浅間焼音すさまじ	7/6	早朝 庭も垣根も真っ白 雪の朝のようである 灰を掻き寄せ 桶に入箱に盛り俵に詰めて・・・晴れて暑くなる・・・豊作 昼過 未の半ば浅間鳴動 西→東へ黒雲 多量の砂降る 稲妻雷鳴激しく轟く、炎は花火の如く枝垂れ桜飛び散る火花 夜 一晚中砂降り続く 雷鳴止まず 寝られず
7/7	朝よりくらし、砂いよいよ強くふり、雷すさまじく時々なり、昼八ツ時より誠に夜のごとく闇に成り、すな弥々降る音夕立雨のふる如し、夜中ふり雷おびたゞしく鳴る	7/7	朝 粗い白砂が積もり 板葺屋根の石も見えない草木は花が咲いたようで 雪の朝のごとし 昼頃 空真っ黒 雷鳴大音響轟音 戸障子揺れ動く 生臭い 鬼が出るか 世の終りかも 途方に暮れなすすべなく真っ暗 燈火をともし 外をあるく人も松明をともし往来す、常闇のごとし、少し雷鳴遠のき、空の色紅の如し火の雨降らんか 申の半ば（4時） 空は真っ黒 雷鳴絶え間なくただ砂だけが降る 霰が降り注ぐ如く垣根に当る音激しく、以前より粒が大きい まじない 伊勢神宮のお札 幣束 石尊権現の大太刀 法螺貝 鐘鼓
7/8	朝雷強く鳴りあらい石ふり 浅間焼音障子びりびりする、九ツ前やミ雨少ふり、やむ	7/8	朝 昨日より荒々しく砂高く降り積もり 板庇はたわみ落ち 泥が降る 砂を道路に敷き詰めると行人の足元見上げるほど高くなる 白くて艶のある毛4~5寸くらいのもの降る しばらくして雷鳴止む 静か
7/9	朝より浅間焼音する		
7/10	昼浅間焼音おひたゝし		
7/12	浅間焼音おびたゞし、暮合より雨大きに		

	ふる		
7/13	七ツ過より浅間やけ煙にてくもり 砂少し降る		
7/20	浅間やけ砂少ふる、入相焼音すさまじ		
7/24	夜はい降る		
7/28	昼より浅間煙りにてくもり 日和吉		
11/22	昼浅間焼音大に聞ゆ、度々鳴る		
11/23	昼浅間焼音度々する、板鼻堰ふしん始る、夜焼灰ふる		
11/24	浅間やける音おびただし		
11/26	七ツ前浅間灰ふる、夜灰余程ふる		
11/27	浅間やけ煙にて薄くもり、灰ふる、九ツ過てり、はい尚々ふる		
11/28	夜五ツ過浅間やけ音おびたゞし		
11/29	浅間焼け煙にて昼薄曇、灰少し降る		
12/3	焼灰少ふる (4日も)		
12/12	風強く八ツ前浅間灰ふる		
12/15	昼浅間灰ふる、浅間焼しずまらず		
4年 4/11	七ツ前まで浅間やけ音四五度雷のごとし、		

文政12年青木周溪著<高崎談叢>第八巻に 聖石の話・癸卯災異記ふりがな・文月浅間記が掲載されている。周溪が筆写した原本は〔天明災異記〕〔あさまの記〕という書名であったと知れる。

〔噴火40年後、埋没していた聖石が顔をだした話〕

天明三癸卯年七月中、浅間嶽焼出し遠近に砂石しやせき泥を降らし、当所辺へ降るところの砂石大なるものは燧石の如し、此川へ日々に流れ下る石は屋根石また茶碗の如くなり、みな円石にして角なし、この砂石の為に埋りしが、文政五壬午年之頃、岸に崩れ出、それより川の中央となり、漸く形勢ありさまを四十年の後始めて見ることを得たり、川原を行けば水車二か所ところにあり、夫よりこまん坂をよじのぼれば右ハ高崎往還なり、左の丘には伊勢神明の宮あり

〔天明てんみやう災異記〕 序文

天明年間浅間山焼にて諸人困苦するもの日々に少なく是を知らざるもの日々に多し、これに依て其事実をしらしめん為にするす、爰に川野辺寛子綽先生の天明災異記真名書にして児童の解しかたきかゆへに、和字を添て論しやすくせしむるなり

〔あさまの記〕 序文

爰に田坊羽鳥某の母に一紅女といふもの有り、俳諧を能くす、安永天明の頃専ら盛に為すといふ、亦和の文を綴ることを好める、是紫女・清女の流れを汲て、浅間之記 といふ文あり、是を閲るに其の時の浮沈艱難目のあたりに見るがごとし、予が十一才の時にして、よく是をしれり、今五十有五齡にして、此こんくなることを書留めて後の児子に示さん